（『国語学』178集　1994・9・30）

音韻史の展開――音節構造の変遷――

日本語の音節

早田輝洋

キーワード：音節、モーラ、上代語、アクセント、抽象性

要　旨

日本上代語の音節構造は、短母音開音節のみで長母音や閉音節はなかった、というのが通説である。しかしそのような言語は存在そのものが疑わしい。ロロ語（彝語）は徹底した短母音開音節言語であるといわれるが、それには緊喉母音／非緊喉母音の対立があり往時の閉音節と開音節の対立を残している。上代日本語が短母音開音節言語であったという通説は疑うに値するものと筆者は信じている。万葉仮名で表記しえなかった母音の長短や、エ・イ列乙類音節さらにオ列甲類音節の二重母音の可能性等を完全に否定し去ることは出来ないと考える。

地理的な分布や世代差、鹿児島市方言の一部のアクセント規則から見ても、日本語諸方言のアクセント（核）の担い手は、歴史的に音節からモーラに移って来ているように思われる。なお筆者は、長い音節を二と数え、短い音節を一と数える音韻規則が有る時、その（必ずしも等時間でない）数える単位をモーラという。

一、上代語の音節構造

「上代語には音節とモーラの区別が無かったばかりでなく、長音節（重音節）と短音節（軽音節）の区別も無かった、後者の区別は漢語の影響である」と現在一般に考えられているようである。「音節とモーラの区別がない（従って音節だけである）」ということと、「長音節（重音節）と短音節（軽音節）の区別がない」ということとは同じではない。英語にも漢語北京語にも音節とモーラの区別は無いが、ともにCVVやCVCのような「長音節（重音節）」とCVのような「短音節（軽音節）」の区別は有る（最近では、英語の重音節は二モーラ音節、軽音節は一モーラ音節とされている）。即ち、日本語の上代語にはCVVもCVCもなく、音節はすべてCV或いはVの形であったというのが通説である（勿論これは音韻論上の問題である。音声的にCVのVが長母音で発音されても、その長母音と短母音とが音韻的に区別されていなかった――という意味である）。古代語資料を見

ると、長母音や二重母音表記をしている仮名表記はすべて単音節語／曲調（contour tone）語のようである。形態論的に――統辞論的にさえ――母音が続くと、先行母音あるいは後続母音が脱落したり両母音が融合したりしているのが、その証拠とされているようである。

しかし、音節構造が(C)Vという短母音開音節だけという言語は、日本周辺を見回しても極めて珍しい（実はそれに近い言語が一つは有るのだが）。それに琉球諸方言に見られる、文献上二音節に溯らない長母音、と短母音との対立も気になることである。一般に、歴史時代の二音節に溯らない長母音は、余程近代的な正書法でない限り、通常、文字には現れない。ラテン語のように母音を並べて長母音を書けばよさそうなものでも書かれていない。琉球諸方言のそういう長母音の発生についてはアクセントから説明できるという主張が有る一方で、周辺言語との比較から長母音の存在を支持する論が最近も出されている。

上に述べた珍しいが少なくとも一つは有るという、音節構造が(C)Vだけ（に近い）という短母音開音節言語とは、チベット・ビルマ語派のロロ語（彝（イ）語）である（南島諸語にも徹底した開音節言語が有ると言われるが、大抵は母音の長・短や二重母音・単純母音の区別は有るようである）。西田龍雄氏(一九九二)によれば、ロロ語を話す彝族は、中国の雲南省と四川省西南部に五四五万人以上いるという。ロロ語音節の基本形態はCVで、母音には緊喉母音と非緊喉母音との対立が有る。有声閉鎖音直前の鼻音の有無は弁別的である。鼻音にも非鼻音にも有声／無声の対立が有る。鼻母音／非鼻母音の対立の有る方言もある。声調は方言により三～五種で語彙的に弁別的、ストレスアクセントは文法的に予測できるものらしい。緊喉母音の発生は「もともと末尾の閉鎖音が縮約し、先行の母音を変形したところにあると考えられる」（p.1102）という。すなわち閉音節韻母が緊喉母音になったものであるらしい。この言語は、母音の長短の対立のない（二重母音もない）開音節のみからなるものであるが、共鳴音子音（sonorant）に狭母音の続く音節は「母音は聞きとれず、子音が持続して音節の担い手になる」。こういうmやlだけからなる音節は、音韻論的解釈によっては、子音音節（子音だけからなる音節）と解釈できるかもしれないが、その持続時間からしても声調を担えるという点からしても、また緊喉性の有無を識別できるということからしても、充分「音節」といえるものであろう。CV音節といっても、母音で始まる音節も有るのであるから、声調を別にすれば、音声的には、CV, V, C, CV, V, C(V)（下線は緊喉母音）の六種の音節が有ることになる。この言語の音節構造は、短母音開音節のみとはいうものの、実は緊喉母音の有無という往時の開音節と閉音節の区別を明瞭に有しているのである。その区別の片鱗すら無いとされる上代日本語とは、やはり、違う。

上代日本語の音節構造を(C)Vただ一種と仮定するならば、ロロ語の現実もよく知るべきであろう。ロロ語の、閉音節に溯る開音節が、周囲の閉音節言語、特に中国の標準語である漢語北京語などの影響をどう受けるか、今後どう変容するか、日本語の歴史の観点からも興味あるところである。

上代日本語は、スピーチ速度が現代のそれに比して余程緩慢であったであろう、とはよく言われることである。確かに、一語の音節数や弁別されるアクセント型の数から見ても、その通りであったと

考えられる。しかし、スピーチ速度が遅いということで、音節構造が短母音開音節の一種類に徹していたということを正当化しうる訳ではない。スピーチ速度が遅くても、母音に関して長短の対立が無ければ、「短母音」である（ロシヤ語やイタリア語等の開音節の単純母音――非二重母音――は、ストレスが有る時、十分長く発音されることが多いが、母音の長短の対立は無い、いわば短母音である――例、Lenin〈レーニン〉）。上代語短母音開音節を主張するためには、文献上の言語でなく、現実に観察できる生きた言語で、徹底した短母音開音節構造の言語を――できるなら幾つも――見せてくれることが必要であろう。その意味からも、上代語のイ・エ列乙類音節の――それだけではない（オ列甲類音節も疑わしい）が――二重母音の可能性を完全に否定し去ることはできない、と考える。

二、音節からモーラへ

通説のように、上代日本語には音節だけが存在しモーラは存在しなかった、そして漢語等外来語の影響でモーラが発生発達したとすれば、日本語は音節言語からモーラ言語に発展してきたことになる。確かに現在「アクセント（核）の担い手」は我々の目の当りで音節からモーラへ移って来ているのが見られる。

筆者（一種の東京方言の話者）は、「天皇」「大王」という単語をそれぞれテンノ⌉ー、ダイオ⌉ーと発音し、複合語「神武天皇」「仁徳天皇」「聖武天皇」「閻魔大王」「金角大王」などはそれぞれ、ジ⌉ンムテンノ(⌉)ー、ニ⌉ントクテンノ(⌉)ー、ジョ⌉ームテンノ(⌉)ー、エ⌉ンマダイオ(⌉)ー、キ⌉ンカクダイオ(⌉)ーのように発音する。ここで ⌉ はアクセント（ピッチの下がり目）、(⌉)は弱化したアクセント（時には聞えない程のピッチの下がり目）である。一般に少なくとも基底形（辞書形式）ではアクセント「⌉」は音節（境界）が担っており、モーラが担っているのではない、と筆者は考えている。即ち、テンノ⌉ー、ダイオ⌉ーのアクセント「⌉」は次語末のモーラ（語末モーラの前のモーラ）「ノ」や「オ」が担っているのではなく、語末音節「ノー」や「オー」が担っている。この方言では、複合語X＋YにおいてYが（二）モーラ以上で、或いは漢字語なら二字漢語以上で）語末音節アクセントまたは無アクセント（平板型）であるとき、複合語X＋YのアクセントはYの第一モーラに来る（カ⌉ントー＋チホ⌉ー→カントーチ⌉ホー、ア⌉ズマ＋オトコ⌉→アズマオ⌉トコ、ハ⌉ト＋クルマ→ハトグ⌉ルマ）、さもなければ上のように複合しない（ジ⌉ンム＋テンノ⌉ー→ジ⌉ンムテンノ(⌉)ー）。Yが語中アクセントであれば、そのアクセントが複合語全体のアクセントになる（イ⌉セ＋モノガ⌉タリ→イセモノガ⌉タリ）。ところが若い世代の間では上の語をジンムテンノ⌉ー、ニントクテンノ⌉ー、ジョームテンノ⌉ー、エンマダイオ⌉ー、キンカクダイオ⌉ーのように言うものが多く、筆者でもエンマダイオ⌉ーはいう可能性があり、「明治天皇」はタイジョーテンノ⌉ー（これは複合していない形ととれる。タイジョー＋テンノ⌉ー）の類推からかメ⌉ージテンノ(⌉)ーよりもメージテンノ⌉ーの方が普通である。これらの形はXのアクセントが無くなりYのアクセントがそのまま複合語全体のアクセントになっているのであるから、アクセント規則に変化がないとする限り、Yが語中アクセントになっているとしなければならない。即ちテンノ⌉ー、ダイオ⌉ーの「⌉」は語末音節「ノー」「オー」ではなく、次語末モーラ「ノ」「オ」が担っていると解釈される。即ちアクセントの担い手が音節からモーラに移っているのである。

これを逆に辿れば、時代を溯るほど担い手は音節になる、ということも考えられる。勿論アクセントの担い手が音節であっても、モーラと音節の区別は有りえて、長音節と短音節の区別も有りうるし（東京方言のほかには古典ラテン語等）、モーラと音節の区別が無くても重音節と軽音節の区別は有りうる（英語や北京語、後に見るケセン語もおそらく――上述の如く、英語ではモーラと音節の区別が有る、というようになった）。

上代日本語が、通説にいう通りロロ語以上に徹底した(C)V音節言語であったのか、一部の南島諸語のように(C)VC音節は無いが(C)V音節と(C)VV音節の区別は有る開音節言語であったのか、はたまた現代語のような(C)V(V)(C)というかなり自由な音節構造を有している言語だったのか、筆者の見る所では未だに全く解明されていない。

三、分析の抽象性

上に述べた、時代を溯れば溯るほど、モーラよりも音節がアクセントの担い手になるかもしれない、ということは周圏論的見方には合致するようである。現代諸方言におけるアクセントの担い手の分布は、列島中央部で次第に音節からモーラへ移行しつつあるように見えるのに対し、東北や鹿児島のような列島周辺部では担い手はいまだ顕著に音節であってモーラではないようである（モーラが無いのであれば当然のことである）――ただし、琉球諸方言は問題である。しかし、その音節というのも余り単純ではなく相当に抽象的な扱いを要する場合もある。鹿児島市方言の例を挙げる。鹿児島市方言は周知のように句末下降型（A型）と句末上昇型――寧ろ多少抽象的に「平板型」と言いたいが――（B型）の二種の単語声調（上野氏の「式」）を有している。ピッチ形としては、句の長さが充分であるとき、A型は次句末音節が高くなりB型は句末音節がやや高くなる（アカペン　A、アオペン　B）。

ところが、歴史的には二音節であったが子音脱落により現在は一音節になっている長音節には次のようなピッチ形になるものがある（サマ＞サー《様》）（これ以下の例は上野善道氏（一九九二）による）、

カワムラサー（川村様：A）　ナカムラサー（中村様：B）　(p.108)

右の対立だけ見るとモーラ単位のように見えよう。さらに、次の歴史的に三音節だったものが一音節になっている超長音節（トオリ＞トーイ《通》）を見ると、

ヒトドーイ（人通り：A）　ヒトドーイガ（人通りが）
ホンドーイ（本通り：B）　ホンドーイガ（本通りが）　(p.108)

「ド」と「ー」の間に音節の切れめを示す分節音上の特徴がないにもかかわらず」（p.109）、「「ーイ」…で…一音節を成していると見るべき形である」（p.108）これは三音節［ト・ヲ・リ］が二音節［ト・ヲイ］になった時の形を残しているのであろう。

本来的な長母音の、西洋語起源の外来語では次のとおり表面形の音節、即ち音声的な音節の意味で次句末音節が高くなっている、

トロンボーン（楽器名：A）　トロンボーンガ
グリーンティー（緑茶：A）　グリーンティーガ
ワンパターン（B）　ワンパターンガ　(p.109)

即ち、通時的に二音節であったものは、分節音上、共時的な表面形

で音声学的に一音節で発音されても、韻律上は一時代前のものを残している。従って共時的にこれを記述する時は、「歴史的長音節」を例外扱いするか、その他の音節を例外扱いするかしない限り、どのような形であれ抽象的な分析が要求されることになる。

付言：以上の例は上野氏（一九九二）の例であるが、鹿児島市方言を母語とする話者であっても窪薗晴夫氏は、例えば、トロンボーンで、「ボー」の所が短くなるとトロンボンになり、トロンボーンは許しがたい発音であるという。

引用文献

西田龍雄（一九九二）『言語学大辞典第四巻』（「ロロ語」の項）、1099-1113、三省堂。

上野善道（一九九二）「鹿児島県吹上町方言の複合名詞のアクセント」、『日本語イントネーションの実態と分析』（文部省重点領域研究「日本語音声」C三班平成三年度研究成果報告書）108-109。

山浦玄嗣（一九八六）『ケセン語入門』共和印刷企画センター。

定　義

一、音節

例えば東京方言において、「里親」と「砂糖屋」の発音を、意味に関係なく観察しても、その音の違いに気が付く。前者は、いわば［サトオヤ］と表せるのに対して後者は［サトーヤ］とでも表記したくなる。前者の［トオ］では、［ト］と［オ］の間に強さの弱まり――谷――が観察されるのに対し、後者の［トー］では［ト］の後に谷は聞えず次第に同じ音が弱まっていくことが観察されよう。両語を不自然でなく短く、部分に切って発音しようとすれば、前者は「サ・ト・オ・ヤ」となるであろうが、後者は「サ・トー・ヤ」としたくなる。そうでないと「谷」の有無を無視した発音になるからである。このような弱まりも無視せずに短く部分に切って発音することを、「どんぶり」について行ってみれば、［ドン・ブ・リ］になる。もし［ド・ン・ブ・リ］と切ると［ド］と［ン］の間に「どんぶり」には無い「谷」が生じ、［ン］が改めて強まり始めてしまう。「札幌」も同様に不自然にならない程度に切って発音すれば［サッ［sap］・ポ・ロ］になる。このような、不自然な「谷」を入れることなく最小に切って発音した切片を“syllable”といい、これを通常「音節」と訳している（「音節」を別の意味で用いる人もいるから「シラブル」の方が安全かもしれない）。「里親」は［サ］［ト］［オ］［ヤ］という四つの音節からなり、「砂糖屋」は［サ］［トー］［ヤ］という三つの音節からなっている。「どんぶり」は［ドン］［ブ］［リ］という三つの音節、「札幌」も［サッ］［ポ］［ロ］という三つの音節からなっている。

以上は「音節」syllable を音声学的に定義したものである。東京方言の場合、これは、上の程度の明瞭な発音であれば、音韻論上の音節としてもそのまま当てはまる。特に「音韻論上の音節」の意味では、E・D・ポリワーノフが遅くとも今世紀二十年代（おそらく一九二七年）に日本語および中国語について sillabema という術語を用いている（音韻論上の単音は fonema）。

二、モーラ

音節［トー］は音節［ト］よりも長い、［ドン］は［ブ］や［リ］よりも長い、［サッ］は［ポ］や［ロ］よりも長い、しかも東京方言

など多くの方言ではその長い音節は短い音節の倍の長さがあると感じられ、現代の定型詩で五・七・五なり七・七と数える時には、長い音節を二と数え、短い音節を一と数えている。そういう方言ではアクセントを指定する際に、この数え方で指定する規則になるのが普通である（例えば、外来語のアクセントの位置）。この単位、即ち［ドンブリ］を四の長さと数える単位、をmoraといい通常「拍」と訳すが、「拍」を別の意味で使う人もいるので私は「モーラ」といっている（ラテン語らしく「モラ」とすべきだという意見もある）。「里親」は四音節で四モーラ、「砂糖屋」も「どんぶり」も「札幌」も三音節で四モーラである。

東北地方の方言では、例えば山浦玄嗣氏（一九八六・三六）によると、長い音節と短い音節の区別はあるが、その長さの比が東京方言等のように二対一ではなく一・五対一ぐらいである、という。即ち「長音節（重音節）」と「短音節（軽音節）」の対立は有る——これは重要なことである——しかし、長音節を二と数え、短音節を一と数える音韻事象——したがって、そういう音韻規則——は、この方言には無いようであるから、長さの単位「モーラ」は存在しないのであろう。長さの単位としては音節の数を数えるのかもしれない。同じく「重音節」と「軽音節」（或いは二モーラ音節と一モーラ音節）の区別が有りながらその長さの比が二対一でない英語は、ストレスとストレスの間がほぼ等時間になると言われる（stress-timed language）。これに対してロマンス語などでは、音節の山と山との間がほぼ等時間に発音される syllable-timed language である。東京方言は mora-timed language になる。

「重音節」と「軽音節」の持続時間の比が二対一でない英語についてもモーラというのは、「後ろから三モーラ目にストレスを置く」の如きストレス付与規則が有る——長い音節を二と数え、短い音節を一と数える規則がある——からである。

改めて言えば、一般に、長い音節を二と数え、短い音節を一と数える音韻規則が有る時（その二なり一なりは必ずしも等時間でなくてよい）、その数える単位を「モーラ」という。

——大東文化大学教授——